

岡本潤回想

清水 清

二月十六日の朝、電話に起された。岡本潤が死んだ知らせだった。彼がそうなることは前の日に、今夜もつかどうかわからない、と聞いていたので、驚くことはなかったが、とうとうまた一人終ってしまったか、と、どこか気落ちする思いが深かった。

その夜、板橋・富士見病院の霊安室の通夜に、上衣の袖がきゅうくつなほど着ぶくれて出ていった。寒い夜であった。病気がまだ充分恢復していなかったため、出かけない方が安全だったが、今夜行かなくては返す時のない借りができてしまう、そういう気持が強くあって、頼りない足さばきで地下鉄の階段を降りた。

通夜には十人あまりの人がいて、秋山清、寺島珠雄、関根弘、野長瀬正夫、菅原克巳、上林猷夫らの顔もあった。秋山の筆で、白木の位牌に「岡本潤の霊」と無雑作に書いてあり、「之霊」でないのがふさわしくもあった。二時間足らず居る間、なぜか死んだ人のことを誰も話さなかった。しめつた空気でないのが助かった。

少年の日に、岡本潤の少年雑誌をいくつか読んだ。いつも貧乏人の子が、一人で数人の金持ちの子の理不尽さを相手にやっつける筋で、痛快だった。同じ頃に愛読した佐藤紅緑の少年小説も金持ちの子と貧乏人の子が登場したが、この方は、両者は友情で結ばれるのだが、岡本小説は対立闘争しかなかった。

岡本潤と知ってから、彼に二度怒られたことがある。ひとつは「詩行動」につながる「詩戦」という雑誌をやっていたときのこと。何かで喫茶店の女の子に、当時平凡社にいた彼を呼び出してもらったら、いきなり「君は女に電話をかけさせるほど偉くなったのか」とどなられて、返す言葉がなかったこと。

もうひとつは、「詩行動」になってから横つ面を張られるような手紙をつきつけられたことだ。その手紙は「詩行動」五号（昭一〇

年七月）に載っているが、「私信として読むのもよし、公開状として読むのも勝手」と前置きして、

（君は生きた言葉をつかもうともせず、小器用に詩をまとめることに腐心して、それで安心していられるか。詩の言葉をつかむということは、詩の言葉を追っつかまわすようなそんなナマヤかしいことじゃ絶対ないんだ）

（今日は良心にも武装しなければならぬ時代である。憎悪なくして今日のわれわれの詩はあり得ないのだ。清水清、君は上村の復讐ということを本気で考えてみたか。（略）やっつけられて口惜しかったら腹を立てろ、腹を立ててガムシヤラに勉強するなり僕にぶつかつてくるなりしろ。なまぬるい奴を友達にもつことはごめんのだ。）

といったぐあいのものであった。文中の上村というのは上村実のことだ。西条八十門下で歌謡曲のようなものを書いていた私に、社会や詩について最初に目をひらかせてくれた先輩だが、失恋とアナキズム運動の苦境の中で自殺した。岡本潤は「世俗が彼の首を絞めた」と追悼の詩を書いたが、この岡本の激しい叱責に返答は書けなかった。ようやく社会の仕組みに目の開きかけた少年に書ける苦も

ないものであった。今にいたるも答えてはいない。

通夜に行かないと返せない借りができるという思いはなんなのか自分でもよくわからぬが、四十年以上たつても忘れ得ない岡本潤の言葉に関係があるのかもしれない。

暫く前までは、秋山清は私に「君は植村諦の弟子だ」といつていたが、いつの間にか変わって近ごろは「岡本の弟子」というようになっていた。どつちの弟子と思つたこともないが、しかし、詩そのものについては少年の日に、植村より岡本潤の詩集「罰当りは生きている」により多くの影響をうけただろうと思う。いま見ると、たいした詩ではないが、標題になつている（罰当り）はことに好きだった。西条八十から脱けきれない時代のことだから、この詩に感動したということは、この詩の持つている抒情が、単純に逆算して、二人のまつたく異なる立場の詩人に、重なり合う体質があるということではないか。

詩句はうる覚えだが、同じ詩集の中の（マダムZ）なども、締めくくりに「マダムZ、ぼくの標的は断じてあなたの心臓にはない」といった力みかえりがあり、恋を恋の詩として書けない、表向きは勇ましいが、実体は弱

さを出しているものであろう。岡本の詩には同じような弱さがたくさんある。『赤と黒』の時代のことはよく知らないから別として、『罰当り』以後は年をとるほどに詩は駄目になつていくと思う。

岡本潤の言つたことで覚えていることがまだある。

「リズムは沈潜するもので、メロディは浮き上るものだ。詩はリズムである」

「詩は山の峰から峰へ飛んで歩くようなもので、散文は山をのぼり、谷へ下り、また登るようなもの」

という比喩である。この比喩は詩と散文を語るのに充分ではないが、詩人らしい表現で一つの側面は言い得ている。私はもちろん鶴呑みにした。もう一つ「弾條としての詩を」というのがある。彼のアジェーションだが、考えてみると、それは岡本自身へのケシかけでもあったかもしれない。

岡本潤は酒癖が悪いという話は度々聞いた。しかし、酒癖の悪い彼を一度も見たことはない。酔って植村諦と喧嘩をし、「お前は日本一酒癖が悪い奴だ」「お前こそ世界一だ」とやり合った話は有名だが、植村諦の酒癖わるさにも出合わなかった。私は酒をのまないか

ら、そういう席に居合わさなかったのだろう。コーヒーぐらいは飲んでる筈だが、その覚えもなくなっている。人生の大方をつき合つた人だのに、生活的な面には、まったくというほど触れなかった。だから、先年『文芸』に載つた岡本の戦時中の日記を読んで、食糧の補いにカボチャやジャガイモを担いで帰つたり、空襲の合間に、板橋から埼玉県の志木のあたりまで娘と芋摘みにいったりの彼に出会つて、世俗ぎらいの人の、彼の詩とは別物の人間像を発見した感慨があった。そこには普通の日には出ていかないのに、大詔奉戴日の式にはわざわざ出勤する、彼の詩とは逆な姿もあって、立ち止つて岡本潤を考えさせられた。

岡本潤については、身近かに、よく知っていると思ひこんできたが、死んでしまつて、こういう文章を書く段になつてみると、その知り方は相当いいかげんなものだと思ひ知つた。岡本にいわれた「上村の復讐」や「弾條としての詩」を書きもしなかつたし、これからも書く気はないが、あの手紙の返事代りにいつか岡本潤論の如きものを書きたいとは思つている。

ある反逆の詩精神

岡本潤論

木原 実

岡本潤が亡くなって、かれが残した生涯の詩を読みあさった。五十年をこえる詩人としてのあゆみには、やはりいぢずなものがあった。変化の多い時代を生きた個性の陰影をたどることができる。

岡本という詩人は矛盾の多い人だった。ニヒリスチックであつてニヒリズムに傾き切れず、アナキスチックであつてアナキズムにも徹し切れず、はげしく政治と権力を否定しながら、バルタイの徒に組みし、やがてそれもぬける。詩の上でも激越な、たたきつけるような手法と、抑制のきいた、やさしい抒情の詩がまじりあう。

気弱な、正直な人でもあつたとおもう。はげしい感情からられて、年来の友人とかたりあうかとおもうと、その友人のためにひどく気をつかう。うちに籠つて孤独に耐えるなど

「赤と黒」第四号（大正十二年）の「赤と黒運動第一宣言」のなかで、岡本はこんなふうにも書いている。それは、「ブルジョア的の自我意識の解体と、既成のあらゆる権威や秩序やモラルを否定する」ものだったと、後年の自叙伝のなかで書いている。

岡本は戦後の雑誌「コスモス」に書いた詩論のなかで、「詩精神とは詩を否定する精神だ」とのべている。岡本らしいアイロニカルな、気負つた表現だが、そういう言葉の裏には、詩人が生涯のモチーフとした否定の精神といったものを、強調したい気持があつたのだろう。

岡本はまた年少のわたしが知りあつた昭和八、九年ごろ、反逆という言葉をししば口にしました。反逆の精神、反逆に生きる、反逆児といった言葉が、三十歳をいくつか越した岡本によつて語られるとき、シニカルであるが美しいひびきをもつて年少のわたしに伝わつた。それは詩人の精神のありかを語る言葉として、年少のわたしの耳朶を打つた。岡本がかれの第二詩集「罰当りは生きてゐる」をだしたころのことである。

「夜から朝へ」のなかにみる、破壊と否定のうずくようなきげは、だから詩人の若い

ということのできない人であつたのだろう。うちにかかえた矛盾や弱みを、不器用にとりつくるおうとして、あるいはそれをのりこえようとして、擬悪的になつたり、平板な指標をもとめたり、ときに現実の喪失感に落ちこんだりする。

そういう意味では、内部的な危機感にさらされて、いわば自我の危機の意識の上に、かれの詩があつたといえそうだ。

こんな天井の落ちて来さうな晩にはくろい空の見えるガラス窓から
ナマな星でも飛びこんで来て
一世一代の奇蹟を見せてはくれまいか
夜から朝へ！

私の運命を刻む世界の時計を
こなごなに砕いてしまいたい！

魂の最初の反逆のさげびであつたといえる。親にそむき、世間にそむき、権威と権力にそむき、そむくことによつてしかおのれを生かし切れないという行為と精神。それを反逆とよぶとすれば、その行為と精神の底にあるものは、閉じこめられた自我の燃えるような情念である。破壊への期待と否定への意志は、そこからうまれる。

岡本潤の詩の問題は、この「破壊への期待と否定への意志」が、いわば反逆の詩精神として昇華し、その詩精神が、詩人の生涯の変化に富んだ時代と社会にコミットして、さまざまにゆれ動いたところにある。

ただ岡本の詩精神の展開のあとをたどり、その意味をたしかめようとする、とくに詩の方法上の変化が、いちずな詩精神の曲折した展開という以上に、かれの詩の動機にかかわる問題としてうかがひあがつてくる。問題がそこにかかつてくるのである。

もういちど「夜から朝へ」にもどつてみよう。わたしはこの詩のなかに、星の奇蹟でもみたいという破壊への希望と、こなごなに砕いてしまいたいとする否定への意志を、その表現とあわせて、岡本の詩の動機の原型とし

狂想が心臓を凍らせる——

今夜から明日への掛橋を

私は一生の長さに数へて踏んでゐる

岡本の最初の詩集「夜から朝へ」（昭和三年刊）のなかにある同名の詩の一部である。

自我の解放をもとめて生涯の掛橋を踏み出した思念によつてささえられている。その思念は破壊と否定。星の奇蹟でも見たいとする破壊への希望と、「こなごなに砕いてしまいたい」とする否定への意志と。

その底にあるものは閉ざされた自我の情念とでもいふべきものだろう。自我の解放にむけて、多少ともロジカルな道筋がそこにあるというわけのものでもない。ただ、閉ざされた自我の情念が燃えて秩序にそむくとき、その道程に、自我を閉じこめる秩序への破壊と、現実の否定への思念がたぎる。

否定せよ！ 否定せよ！ 否定せよ！
われわれの全力を否定に傾注せよ！
斯くしてのみ、われわれは存在する！
われわれは生活者たり得る！

とらえてみた。岡本の詩がその後の展開のなかでみせる幾つかの問題をどくカギが、そこにふくまれていくからである。

この詩のなかの問題は、第一に「破壊への希望」と「否定への意志」の表明という表現と、その奇妙なくみあわせにある。

「ナマな星でも飛びこんで来て／一世一代の奇蹟を見せてくれまいか」という破壊への希望は、いらだつた心情の表明で、破壊というより破壊への夢想でもある。それにいらだちの影に子どもじみた夢想の甘さが残るのは、詩人が破壊すべき、あるいは否定すべき現実を見失っているからである。この現実の喪失感にかさねて、否定への決意表明の詩語がつづく。「私の運命を刻む世界の時計を／こなごなに砕いてしまいたい！」という否定への意志は、それだけが空疎にうきあがる。

それでも詩人のモチーフは、破壊と否定にある。そうなるモチーフの情念だけがあつて、「明日への掛橋」とあいわたるころがない。詩のモチーフは情念という詩人の心情によつて叙情に流れる。

暗い夜の底をあらしが流れて行く
おれは盃を投げた

起て！行け！

蒼白い鬱憂の酒場の葬儀場から
永劫に流転する墓場の彼方へ！
愛慾と動乱の嵐の真つ只中へ！

おなじ詩集の「火のついた心臓」の一部だが、モチーフが先行して、みごとなロマンチズムになった詩だ。この種の傾向は「罰當り」以後の詩にもよくでてくる。岡本の詩的心情からすれば、このようなロマンチズムは、「破壊への欲望」と「否定への意志」が、心情のなかでひとつになったとき、浩然と歌になってリズムがこころがりだすといったものである。しかしそれは、詩による現実の否定でも、破壊への欲望でさえもない。詩としてはただの心情の誇示でしかない。

詩人は、この心情の誇示をもって、みずから「反逆の詩精神」と考えたのではあるまいか、という疑問がいまわたしにある。若い岡本の詩精神は、現実の喪失感に根ざし、その孤立したからだちが破壊への欲望と否定への意志を生むが、それもただ心情の誇示に流れるという形になっている。

岡本の詩の第二の問題は、かれの詩的動機

ともあれ、若い岡本は、「氣質的なアナキズム」と、ニイチェや、のちに「自我の経典」とよべられたり、個人主義的無政府主義とよべられたシュティルナーの思想にも影響されながら、詩人としての出発を準備する。

だが岡本のその後の詩にあらわれたニヒリズムは、ニヒリスチックではあっても、ニヒリズムといえるほどのものではない。「否定せよ！否定せよ！」とさげびながら、「夜から朝へ」にみられるように、否定すべき現実とあいわたるところが夢想や心情の表明に流れて、否定すべき現実を失っている。その現実喪失をかれはニヒリズムと考えたのだろうか。ニヒリズムにおける否定の論理は、現実の喪失の上にはなりたない。否定すべき現実があつてそれとわたりあい、そのわたりあいをつうじて現実を再構成する。そこに個々の自由が生きてつらぬかれる。ところが個々の自由をもとめる詩人は、現実から疎外され、孤立し、孤立したところで現実を喪失している。

壊れた心臓をおきざりにして
動乱は遠く去つていった。
手をのばして

をかたちづくる上で、影響のあつたとみられるニヒリズムの問題だ。

岡本潤が文学的な出発を準備しはじめた大正十年ごろ、岡本は東洋大学に席をおきながら、アナキストグループの北風会に出席したり、そのころ結成された日本社会主義同盟に関心をよせ、はげしいアナ・ボルの対立を見るなかから、「理論的というよりはむしろ氣質的に、反権力思想としてのアナキズムに傾いて」いった。大杉栄を読み、ニイチェにひかれ、シュティルナーの「唯一者とその所有」に傾倒した、という。

「自我と社会は、ぼくの内部と外部とで相対立する矛盾概念であつた。外部の社会に目を向けるとき、資本主義の打倒、社会主義の建設は第一の必須目的であつた。だが、内部の自我に目をそそぐとき、たとえ社会主義的なものであろうと、あらゆる外部規制にとらわれない自由な個性が発揮されねばならぬと考えた。シュティルナーのいわゆる創造的虚無により、外的規制としての政治や既成道徳に対する反措定をモチーフとする文学表現をもとめて、散文詩のような短編と詩をいくつか習作した」と、岡本は後年の自叙伝「罰當りは生きている」のなかで書いている。そ

手をのばして

やつとつかんだものは
からつぽのコップか

目もない 耳もない 鼻もない
つんつるてんの女の顔か

(都会の疲労)

と、岡本は最初の詩集のなかで、書く。見失つた現実とあいわたらうとするのはただの夢想でナンセンスだが、岡本は否定のモチーフに促されて、それにいどむ。そこから「星の奇蹟」でも見せてくれという願望がうまれる。それは岡本の詩のなかでやたらにうまれる。

「誰れか一つ、こいつを引きずり出して／思ひきつて大地にぶちつけて見ないか(無題)」「何か起りさうな晩だ……と／くろい墓場のつちを踏んで行く(墓場)」といった期待感と欲望の姿勢。それはいらだちと孤立感と、疎外感のいりまじつた心情の吐露でしかない。そこにはニヒリズムの論理も宿りようがない。

「破壊と否定」をモチーフとしてうたいながら、思想は心情に溶解し、溶解した思想によつては、破壊し否定する社会的現実とあいわたることはできない。心情は誇示できる。一方で破壊への(ある

して、「万物はおれにとつて無だ！」というところにこそ、アナキズム思想の極致があるのではないか、とも考えていたという。

岡本の自叙伝の第一巻がでたのは昭和四十年で、詩人が六十歳のなかばに近づいての回想であるから、そこには多少とも若い日の心情をととのえたということもある。そのことをふくめて、若い日の詩人が、理論的というよりは「氣質的なアナキズム」に傾いていたといい、シュティルナー流の創造的虚無といった思想によりどころをもとめたというのは、岡本という詩人の氣質と動機を知る上で考慮にいれておいてよいことだ。

シュティルナーの創造的虚無という思想がどういうものか、また、「万物は無である」とする思想がアナキズムの思想の極致であるのかどうか、いまそれを解説する必要があるまい。岡本にとつてそれがどのていどの詩人の思想たりえたのか、それををはかる必要もあるまい。詩人が氣質的という言葉をつかってアナキズムに傾いたとべているように、アナキズムもシュティルナーも、論理化された思想としてよりも、詩人の氣質をふくらませ、情念のよりどころとしてとらえられたものであろう。

いは破滅への(欲望をいらだちの心情をふくめてうたい、他方では否定への意志を強調するというのが、岡本のモチーフに根ざした詩の構図だが、心情の誇示によつてうたうとき、そこには心情によりかかっただけのあまさがでてくる。

その心情のあまさが、岡本の擬似ニヒリズムであり、彼の叙情詩の源泉ということになる。

岡本の詩のつぎの問題は、かれの「叙情詩」の問題だ。

岡本の詩の出発点における「破壊と否定」という動機は、かれの氣質をはぐくんだ生いたちや若い日の生きざまをかさねて、時代にコミットしてゆくものがあつた。第一次大戦後の、成熟した資本主義は社会的な矛盾をひるげ、デモクラシーの空疎なよびごとと、奇妙に出口のない社会の閉塞した状況があつた。出口をもとめていらだつ自我のさげびが、既存の秩序や価値感の否定と破壊にむかう状況は、色こく存在した。

「赤と黒」の投じた「黒い爆弾」が、芸術革命の烽火として、その同人たちの予想外の衝撃力となりえたのも、おそらく同じ理由に

よるものだったろう。岡本の詩は、「赤と黒」

の同人たちのなかでは、すぐれて美しい。

だがそれは、必ずしも破壊の美しさというほどのものでもなく、否定の強烈な美というものでもない。それをふくめたとしても、どちらかといえば、弱気でニヒルな叙情が美しい。それはなぜかというのがここでの問題である。

都会の風景がばかに歪んで見えるのは窓ガラスの凹凸のためか

それとも衰弱した眼球の錯覚であるか

雪解のぐしゃぐしゃな道路を

前屈みによるめいてゆく人々よ

君たちの心臓は蹴だらけではないか

へしゃげた自動車と

蛇行する電車と

よれよれの電柱と

巨大な動物のごとき建物建物が

みんな泥のやうに溶けてしまひさうだ

へんに黄いろっぽい光りが街中にながれて

ある

疲れはてた倦怠の午后三時―

この窓ガラスの内部に監禁された眼は

ああ すべて生活力を失った空虚な瞳孔で

ある！ 「窓ガラスの内部から」

「疲れはてた倦怠の午后三時―」と詩人は書く。窓ガラスのなかに閉じこめられた空虚な目につる歪んだ街。すべてが泥のやうに溶けてしまひさうな、黄色っぽい光の流れる街。この風景の倦怠は、創造的虚無などというものではあるまい。現実の喪失感が、ただ無気力な叙情をうんでいるにすぎない。ここには否定も破壊もない。詩人はそのモチーフさえも失ったところで、そこに漂うやさしさと「監禁された眼」によって、「窓ガラスの外」に対してはいるのだが、わずかな自嘲がそれにかさなるだけだ。

「陰気な虚無的な感情に沈酒してゐた僕の過去を笑ってくれ」と、岡本はこの詩集「夜から朝へ」の序文のなかで書いているが、岡本という詩人は、ほかならぬその「虚無的な感情」によって、それもゆくにやさしいニヒルな心情によって、ほんとうはいい詩を書いた詩人ではなかったかと思う。

この詩のなかにみられる心情のやさしさのようなものは、のちの岡本の叙情詩のそれでもある。やさしい虚無的な心情を湛えたものが、岡本が生涯内にもちつづけた詩人の本性

れである。かれの「破壊と否定」のモチーフ

は、現実の喪失感の上にあった。かれの叙情

はその失われた現実とあいわたることのない

モチーフの、その空疎なさけめを漂う詩人の

心情にほかならない。その心情を「気質的な

ニヒリズム」と言ったが、それは孤立感と自

嘲と反逆と、そのないあわさった感情である。

そしてその感情の外にのこされるのは、「破

壊と否定」のモチーフということになる。「破

壊と否定」のモチーフが消えたところに、か

れの叙情詩がひろがる。

岡本が第二詩集「罰当りは生きている」を出した昭和八年ころは、岡本がアナキズムの運動に近づいて、いわば「否定への意志」を実践を媒介して表現する条件をもった時期である。

「夜から朝へ」のなかでは、詩による現実否定の契機を失っていた詩人が、社会的な動機のうち自身において、「芸術の革命」から「革命の芸術」へと転進をした時期でもある。かれはここで現実喪失のいらだつ心情のかわりに、テロリストの心情と否定の美を追及した。

彼はしのびよる

彼の眼は氷のやうに冴える

彼は突入する

彼は微風よりも静かである

匕首！

電光！

悲鳴もない

叫喚もない

眼り呆けた街

血は真昼の静寂を乱さない

動かない風景に黒い一点のシミ

洞穴のやうな瞳孔がある

底の知れない虚空がある

――誰ひとり幕をおろす奴がない！

（白昼無言劇）

テロリストの緊張した一瞬をえがきだして

「否定」の美が完結する。詩人の高揚した心

情が凝縮してニヒルな感動を誘う。詩人の反

逆の詩精神は、白昼無言劇に集中し、やがて

その周辺をさまよう。しかしその周辺は索莫

としていて、情緒をととのえようとすれば、

「鳴らせ！おれたちの手で――今までにな

い夜明けを告げる汽笛を！（汽笛と屍骸）

「おれには悔恨もなく嫉妬もない／今宵月は

ではないか、とさえおもう。

そうだとすると、岡本の破壊と否定のモチーフはどうなるのか。反逆の詩精神を信条とした岡本にとって、そのようなやさしい叙情は、ときに、「笑ってくれ」といふべきもの、自分の弱さ、とも考えられた。「詩精神とは詩を否定する精神」と、岡本が岡本らしく言い放ったのも、自分の詩の弱さを考えることを、意識においての強弁であつたかも知れない。

しかしかれの生涯の詩を読みかえしてゆくと、破壊と否定の動機が強烈にはたらいいているとき、その表現のなかにつきまとう叙情があつて、それをわたしは美しいとおもう。

ところが、破壊と否定の動機が弱まるにつれて、かれの「虚無的な感情」にひたされたやさしい叙情が詩の正面にふくれあがり、ひろがってくる。そういうときの岡本の詩は、詠嘆に流れたり、ときに概念的になって、叙情詩としてもひどく退行したものと成る。つまり、「破壊への待望と否定への意志」を動機としてもつ岡本の詩のなかに、本音のやうに流れているのはゆうにやさしい叙情の詩情という構図は、詩人の本性が、「気質的なニヒリズム」にとどまる、ということのあらわ

冴え／河岸には凝然と立つ鉄骨がある（マダムZ）という工合になり「おれら、ゴロツキといはれ ヌスピトといはれ…（おれら）」という心情の誇示におわる。

こういう詩を読みかえしていると、詩による「現実の否定」とは何なのかと考えざるをえない。この時期にも岡本は、主情的に心情をうたい、否定への意志をぶつつけるだけで終っている。「夜から朝へ」のなかに少しはあつたイマジネーションによって現実を否定するといった方法は消えて後退しているのだ。

また「学校を追はれた不良児は社会の不良になつた／その罰当りがここに生きてゐる／正義とは何かを掴んで自分を曲げずに生き抜こうとする反逆者の仲間に加はつて／飢えて死んでも負けるかと言つて生き通してゐる」といった詩句で構成される「罰当りは生

きている」の一篇は、岡本の気質をそだて反逆心を生んだかれの実人生の原点にあるものをうたつた詩だ。母親への思いとかさねて、後にも「おふくろのわらべ唄」などの作品がある、その体験は岡本には大事なものであろう。

だが、「あなたの腹から出てあなたを蹴つた罰当りの一人息子」が、死んだ母親に「お母さん！」とよびかけ、不良の正当性を母子

の愛情にからませて説いてみせる。涙ぐましい母子物語で、メロドラマめいてさえるが、このメロドラマが、あのテロルに凝縮する心情とどこで結びつくのか。兇悪なテロリストにも肉身によせるやさしい愛情があったというので、そのことがひろく喧伝された時代であった。小林多喜二の母の話もあった。いずれも肉身との情愛のなかに反逆の論理をくもるとするものだった。だがそこにあるものは論理ではなくて親子の情であり論理化されない内側の心情である。

岡本の「反逆の詩精神」やその氣質をそだてた原点に、こんなにも「庶民的な」心情があつて、岡本はいつでもそんな心情のなかに逃げこむところをもつていた——とすると、岡本の「破壊への欲望」というあいまいな甘さをもつモチーフも、声高な「否定への意志」も、自我の危機感さえも、「お母さん！」とよびかける心情のなかへ消えてしまう。何ともむなしのお母さんがのこる。なぜなら岡本のような反逆児でも「お母さん」と呼ぶとき、そこに情動的な救いの場が用意されているのだから。

時代が戦争にむかつてすみ、岡本の「破

壊への欲望と否定への意志」が、社会的実践をつうじてもむつかしくなりはじめたところから、岡本の詩は、技巧にすぐれた叙情的な詩に移つてゆく。

昭和十六年にでた『夜の機関車』や、戦後になつてまとめられた『橋』の詩集には、かれの叙情詩の世界がひろがる。

「何を求め／こんな時こんな山の中へ来たのだらう／——おれに訊いてもおれは知らぬ／今日の道をおれは何処に向はう(山の宿)」。こんな叙情詩のなかでかれが失っているものは、「破壊への欲望」であり、現実否定の声高な意志表明である。ニヒルな心情の凝縮していったテロリストへの傾倒も、現実の喪失感のなかに消えてゆく。岡本にのこつたものは、ふたたび現実の喪失感だけだ。「すぐそこにあつて／手のとどこかない空／雲団は漢々(空)」。あるいは「あつちで呼んだかと思ふと／こつちで呼んでゐる／遠い声だ(山の湖にて)」ということになる。

岡本は「挽歌」を書き、「歴史を書いて死んだ友人たちを悼み、その詠嘆と追憶のなかで、わずかにおのれの位置をたしかめている。「破壊への欲望」のモチーフは、顔ぶちのなかの風景のドラマとしてはりつき、「否定へ

の意志」は叙情のなかへ溶解した。その溶解のなかで「夢の戦場」「ぼろぎれ人形」などが書かれる。いずれも少女になつた一人娘に寄せておのれをあたためているような詩だ。それはどこかで「罰当り」の「お母さん！」というよびかけとつながっている。肉身の情愛のなかに後退してゆく心情のリアリズムがある。

戦後吉本隆明らによつて批判された岡本の戦争詩は、いま読んでみると、この肉身の情愛のなかに後退してゆく心情のリアリズムの線上にある作品である。「わが少年の日の夢が蘇つてくる／われ海に生き海に死なんと／海軍兵学校を志願し／近視の宣告で空しくやぶれ去つた／わが少年の日の夢が——(世界地図を見つめてゐると)」といったものだ。とつてつけたようなへたくそな詩だが、後退してゆく心情のなかに、「否定への意志」を溶解させたとき、岡本は戦争という壮大なドラマに、自分をあわせてゆく以外になつたのだらう。金子光晴が弁護したように、岡本は積極的に叫んでいるわけがなし、あの状況のもとでは仕方なかつたというていどのものだったとしても、岡本の吉本への抗議のように「日本庶民のひとり」の心情ということである。

すむわけでもない。この点ではやはり岡本の詩精神が叙情詩へと後退してゆくなかに、社会的理性さえも崩れる要素があつたというのが正当な判断になるだらう。

戦争が終つて、岡本は『檻樓の旗』をかざして、党派的な詩人として一時期はなばなく活動した。

このとき、かれの「氣質的なアナキズム」や「氣質的なニヒリズム」はどうなつていたのだらう。長い戦中の叙情詩のなかに抑制されてきた反逆の詩精神は、ところを得て蘇つていたのだらうか。この時期の岡本の代表的な作品とみられる「動物行進譜」や「エデンの島」や、松川裁判を諷した「神の声」などは、読みかえしてみても息がつまるほど岡本の詩としてはつまらない詩だ。

戦争が終つて岡本はなぜこんな貧しい詩を書いたのか。党派へのへつらいか。現実の誤認か。すくなくとも、岡本は自らの詩精神の誤認の上に立つていたとしか思えない。岡本は戦後のまぶしいライトのなかで、こんどは自らを喪失していたのだ。そうでなければ後にも先にも、こんな軽い政治詩を書く詩人ではない。政治のエスカレーターに乗つて、お

きまりの歌をにぎやかにうたつたとき、岡本の詩精神は、すでに静かに終末をむかえていたのだ。

岡本の「破壊への欲望」は、戦中戦後のすさまじい破壊の進行のなかで、どうやら立場を失つてしまつた。ナマな星の落ちてくるような破壊は、それを待望した岡本によつてではなく、体制によつて行われた。甘い待望という姿勢では、その破壊の前に自失するほかはない。否定というモチーフは、現状肯定的な叙情のなかに消え、岡本の詩の戦後の荒廃はそのモチーフの喪失にある。反逆の詩精神は、状況のなかで平板な心情に溶解し、かれの最後の詩集『笑う死者』(昭和四十年刊)でかれの詩の生命は終る。

あたりがすつかり凍りついた夜ふけ

枕もとのスタンドを消すと

ぼくの夜は鳴動する (中略)

つきつきに現われる

ぼくの新しい死者たち

おお みんな

冷たい獄舎や 熱い戦場や

さかまく激流や 荒れさびた孤立のなかで

死んだ連中だ (以下略) (笑う死者)

なんとしあわせそうな歌であることか。現実の喪失感のなかで、いらだち、自嘲し、反逆の心情をいだいて詩を書いてきた岡本の周囲に、最後に訪れてきたのは懐しい死者たちだった。親しい死者たちの笑いかこまれて岡本はやつと安住の場をみいだす。回想と、もはやトゲのないおしゃべりが、最後の詩集を掩うている。そして詩集の最後のところで、岡本は書いている。

なんてことだ

おれがゴールだと思つたのは

おれのスタートしたところじゃないか。

(ゴール＝スタート)

岡本はそれでも反逆の詩精神によつて生きたかつたのだ。

秋山清詩集

季節の雑話

(A五版) 二一、〇〇〇円

5月10日発売

東京 創樹社